

ランチオンセミナー2

Luncheon Seminar 2

日時 2026年4月11日(土) 12:20~13:20

会場 第2会場 ホテル日航奈良 4F 飛天C

〒630-8122 奈良県奈良市三条本町8-1

見逃され続ける モニターアラームへの 包括的アプローチ

座長 石川 真士 先生

日本医科大学 麻酔科学教室 教授
日本医科大学附属病院 麻酔科・ペインクリニック部長

演者 恵川 淳二 先生

奈良県立医科大学 麻酔科学教室
集中治療部 病院教授
医療の質・安全管理センター 副センター長

本セミナーは整理券制ではありません

直接会場にお越しいただき、先着順にご入場いただきます。
なお、軽食数・座数には限りがありますので予めご了承ください。

ランチョンセミナー2

Luncheon Seminar 2

見逃され続けるモニターアラームへの 包括的アプローチ

恵川 淳二

奈良県立医科大学 麻酔科学教室

集中治療部 病院教授

医療の質・安全管理センター 副センター長

Monitorの語源はラテン語のMonēreと言われており、「気づかせる」「警告する」といった意味を持つ。病院に勤務する医療者は、日々多くのモニタ機器に囲まれて治療やケアにあたっている。モニタ機器は、私たちにとってなくてはならない当たり前の存在になっている一方で、その意義について十分理解されないまま使用され、患者の急変を見逃す事例が散見されている。モニタ機器の装着はあくまで連続測定であって、モニタリングではない。モニタリングは、その語源にある通り、モニタ機器が発報するアラームに気づくことができ初めて成立する。医療者がモニタ機器から発報されるアラームに気づくことができない要因は複数に及ぶが、重要な要因として、「アラーム疲労」と「アラームに気づきにくい環境」があげられる。アラーム疲労に対しては、介入の必要ないアラームをいかに減らすかが重要な点となる。具体的には、テクニカルアラームを減らす、適正なアラーム閾値を設定する、病態として必要なモニタを選択して患者に装着するなどがあげられる。これらに対しては、特に教育が重要で適切な教育を行うことで介入の必要のないアラーム数を大幅に減少させることができる。アラームに気づきにくい環境への対応としては、いつでもどこでも医療者がアラームに気づくことができるシステムの導入や院内電波環境の整備が重要となる。当院では、看護師の持つナースコールスマートフォンに、バイタルアラームが通知されるモバイルモニタリングシステムを導入しており、これによりいつでもどこでも患者の異常に気づくことができる環境を整備している。

共催：第37回日本臨床モニター学会／
フクダ電子株式会社